

東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第14回 前編

◎支えている人 / 話し手：廣川 和紀 さん

一般社団法人プレーワーカーズ 理事/事務局長

16歳の頃に子どもに関わるボランティアを始める。大学卒業後、遊具・保育教材のメーカーで勤務するかたわら、プレーパークの活動を行った。東日本大震災後、職業プレイングワーカーとしての道を歩み始め、仲間と共に一般社団法人プレーワーカーズを設立。



震災前から震災当時のこと

私は東京生まれ東京育ちで、大学卒業後の2009年から、幼稚園や保育園に納める保育用品などを作る会社の仙台支店で営業を担当していました。月曜日から金曜日までは仕事をして、土日の仕事がお休みの日は、仙台のプレーパークの活動にボランティアとして関わっていました。そういう生活を2年弱続けていた頃に震災がありました。

震災後、仙台のプレーパークの仲間と、石巻の飯野川というところに住んでいる人から、大変なんだという声を聞いて、2011年の5月初旬に震災後初めて石巻に行きました。その時はまだ大きな公共施設や中学校の教室などが避難所になっている状況でしたが、どの場所でプレーパークをやれるといいかな、と下見のような感じで行きました。飯野川という町は大川小学校の対岸にある町で、大川小学校の地区の子どもたちが飯野川に一時避難している時だったんですね。なので、飯野川の人でも大変で、大川の子たちも集まってきているという状況もあり、こどもたちのために何かできないかなと話している中で、プレーパークの話になったという経緯です。私も5月までは生活立て直すのでいっぱいだったため、こどものために何かしようと思ったというよりは、プレーパーク仲間からの声があって、やりたい、お手伝いしたいなど思い石巻に来始めたのが、震災でのこどもの支援というか、あそび場づくりの最初でした。

飯野川のプレーパークについて

飯野川のプレーパークは、最初は「亀ヶ森公園であそんでみよう」、という企画でした。そこから亀ヶ森冒険あそび場と名前を変えて、細々ですが、月に一回のペースですずっとやり

続けています。私は石巻に移り住むことはできないけど、仙台からは1時間半くらいで行けるので、月一回くらいだったら仕事しながらでも長い間関われるだろうなと思っていました。その頃、子どもたちの周りにはたくさんのボランティアの方が来てくれていたんですけど、だいたい2、3日すると帰っちゃうんですね。わーってあそんであげて帰る、そういうのはたくさんあるんだけど、子どもはだんだん、どうせ帰るんでしょ、という態度になってくるんです。それを見た時に、地域の人、近くの人が、細くでもいいから長く関わり続けて、お互いに名前を呼び合って関係性を築くことが必要だと思いました。活動自体は今もずっと続いているので、もう13年やっていますね。震災がきっかけであそび場を始めて、やめていないってことです。続けられているのは、仙台のプレーパーク仲間飯野川在住の言い出しっぺの人がやり続けているからなんですけど、その人は、そもそも震災関係なく子どもにはあそびやあそび場が必要で、地域にとっても必要だからやるんだと言っていました。おそらく、震災前からやりたいと思っていたんですね。ただ、なかなかひとりじゃ始められない中で、こういう言い方がいいかはわからないけど、震災というきっかけがあって、始めて、やり続けているということなんです。

仕事としてのプレーワーカーで、活動を続けていく

私は今、プレーワーカーズという団体に所属していますが、プレーワーカーズの前身は、NPO法人日本冒険遊び場づくり協会という全国の冒険遊び場の中間支援組織が行う緊急支援事業でした。震災後、日本冒険遊び場づくり協会が、気仙沼にあそび場を立ち上げたんです。地元の人の協力の元、土地を借りて、例えば竹を伐り出してすべり台作ったりして、「気仙沼あそびばー」という常設の外あそびの場を作りました。ただ、そこ一か所だけじゃあそび場は全然足りななかったので、プレーカーという派手なワゴン車に、いろんな遊び道具を積んで各地に回って、イベント的にあそび場を作る活動も行っていました。そのプレーカーを走らせていたのが、現在プレーワーカーズの代表をしている須永という人で、私は須永と石巻で出会い、プレーカーの活動を手伝うようになりました。そこから、2014年にプレーカーの活動に専念しようと思い仕事を辞めて、日本冒険遊び場づくり協会のスタッフになり、石巻を担当しました。

当時は、この状況を変えてやるぞという気持ちでした。それまで、仕事を通してたくさんの素敵な園長先生に出会い、いろんなお話をさせてもらって、また様々なものを売る中で、子どもにとっての環境って何がいいんだろうと考えるようになりました。仕事での様々な方との出会いとそこから考えていたことと、プレーパークの活動に関わっていたことが掛け合わさって、子どもにとってはあそびの環境が必要だという想いが強くなったんだと思います。そして、自分がやりたいことは、この会社にいる中ではかなえられないかもしれないと思い始めたことと、プレーカーの活動を広げるためにスタッフを募集していたというタイミングがちょうど重なって、プレーワーカーを仕事にしました。

仕事としてのプレーワーカーになって

プレーカーの乗組員になってからは、石巻中をプレーカーで走り回って、呼ばれたところにお手伝いしに行くっていうようなスタイルでやってきました。始めは日本ユニセフ協会の支援があったのですが、それは2年くらいしか続かず、でも、その時期じゃまだまだこの活動はおられないねと話していたので、プレーワーカーズという一般社団法人を、代表の須永と、気仙沼のあそびばーに常駐していた神林と僕の3人で立ち上げて、活動を続けました。

法人を設立した時期は、活動の過渡期だったと思っています。震災直後は、地域の人が地域の子どもたちのためにと、本当にたくさんプレーカーを呼んでくれていたんです。しかし、2015年くらいに、そういった依頼が入って来なくなっちゃったんですね。代わりに、お祭りとかイベントをにぎやかにするためにあそび場を作りに来てくれない？という依頼が増えました。でも、それは自分たちがやりたいことじゃないのに、それを震災の文脈の中で、無料でやり続けることに違和感をすごく感じていました。なので、自分たちで法人を作って、ちゃんとお金をもらって活動費を作るために割り切ってやろう、ということになりました。同時に、その頃は復興公営住宅ができた時期でもあったので、石巻で活動していた他の団体と一緒に、公営住宅の集会所やその目の前の公園を使ってあそび場を開いていました。コミュニティづくりですね。みんなばらばらの仮設で住んでいたところから、またばらばらに集まって、もう一度、そのコミュニティとか町を再構築していかなきゃいけないという時期になってきていました。なので、その頃は感覚的にまだ（震災復興の）流れの中でした。緊急支援があって、やっと仮設で暮らし始めて、しばらくしてからようやく復興公営住宅ができてきたね、これからだね、という流れの中でした。お金のほうが切れちゃうとか支援の団体が撤退するとかありましたが、いや、まだまだでしょ、という感覚でしたね。

また、あそぶということに関しては、震災によってあそびやあそび場が失われたのではなく、本当は震災前からあそべていなかった、ということがよくわかってきた時期でもありました。そもそも、みなさんわかっていたのかもしれないと思うのですが、子どもたちのためになんとかしなきゃ、と思う大人は震災直後にたくさん増えたけれど、町のハード面が復興する中で、公営住宅や新しい公園ができて落ち着いたからもう通常通りでいいよね、となってしまった。しかし私たちは、そうじゃないでしょう、こんな公園でどうやってあそぶんですか、こんな状況でどうやって子どもたちが豊かにあそべるんですかという気持ちがありました。もしかしら震災が原因というより、元々持っていた、子どもがあそぶことが大事だよという想いを、もっと強く思い始めた時期だったかもしれません。

災害時のあそび

今、能登半島で震災があり、能登にも関わっている中で東日本のことを振り返ることが多くなってきてあらためて感じています。緊急期はやはり命の支援だという中で、子どもにとってはあそぶことは命に直結する部分だと思うので、水や食べ物、食う寝ると同じくらい

あそびが大切と考えています。あそびが確保されない状態の時には、緊急的にどんなことでもいいからあそびを届けることをやっています。あそぶということは、こどもにとって生きることそのものだっていう言い方をしています。大人である自分の実感としては、震災当時、大したことなかったけど被災地にはいて、最初の数か月は生活も大変で、そんな中でプレーパークの仲間、大人たちと会った時に、とにかくわーっとしゃべったんですよ。大丈夫だった？何してたの？大変だったよね？ってとにかくしゃべってしゃべってしゃべって、時には涙を流す、その時間がすごく大事だったと思っています。それまで、よくわからないけど日々大変な中、ぶわーっと走ってきた、全速力で走っていたんだけど、すこし一息ついて椅子に座ってしゃべって、落ち着いて、という時間がすごく大事だったっていうのは、自分の実感として思っています。じゃあこどもってどうしているんだろうなって思った時に、やっぱりこどもにとってはあそぶってことなんだろうなと思います。しゃべるもするけれど、しゃべるだけじゃなくて、とにかく同じ時間を共有してあそぶとか、ゆったり過ごすとか、そういうことがすごく大事だと思いました。それは緊急時にこそ必要なことで、ストレスの発散や昇華になるんだと思います。大人は言葉を持っているけれど、持っていないこどもにとってはすごく有効な手段だろうと、最初はそのことをけっこう考えながらやっていました。でもそこから段々と、あそばないと心が死んでいってしまうことを思い始めました。寝ないと死んでしまう、食べないと死んでしまう、というのと一緒に、こどもはあそばないと心がなくなって死んじゃうんだろうなという意味で、やっぱり命と一緒になんだって思います。なので、災害時だけじゃなくて普段からもずーっとそうなんですけど、災害の時は特に奪われがちだと思います。大人もなかなか余裕がなくなってしまいますしね。

暮らしの中のあそび

緊急時から落ち着いてきた後は、仮設ができて、公営住宅ができて、暮らしになっていきますよね。暮らしになってコミュニティをつくり出していく時に、こどものあそびの支援がその都度必要になると思います。特に、こどもの日常的なあそびの支援です。単発的にあそべばいいとか、この日だけあそべればいいということではなく、日常的にこどもがやりたいって思ったことをやれることが大切だと思います。暮らしをつくるということと、プレーパークなどのあそび場をつくるということは、市民の力でつくっていくものだと思います。あそび場つくったからあそびなさいっていうよりは、地域の人がこの地域の子どもたちのために考えよう、ということのを推し進めていきたいなと思っていて、それがまちづくりになるし、復興になっていくんだろうなと考えています。例えば、最初にやり始めた飯野川の亀ヶ森というところから、もう少し川を上ったところに北上町というところがあるのですが、その小学校の裏山を使って、常設のプレーパークを作っていた時期もありました。そこは、地域の人が立ち上げたところに私たちがプレーリーダーとして入って、一緒に活動するという形で、毎日のようにこどもたち、特に小学生と一緒に森の中に入って、おにごっこをしたりハンモックやブランコをつけたり、6年生の子はチェーンソーで木を伐って好きな

ものを作っていましたし、火も使ったり、遊具も作りました。私たちのプレーカーの運用の仕方は、地域の人が出て、地域の人から依頼をされたら、それに合わせてどんなスタイルでもやるよ、というものです。プレーパークだから火遊びしなきゃダメです、みたいなことを推したいわけではなく、地域の人から地域のこどものことを考えようと思った時に相談してもらって、場所探しから一緒にやって、こんな場所でこんなふうに行っていいかもしれないね、なんて一緒に考えながらやり始めるという形です。この形を自分たちのプレーカーのスタイルとしてずっとやってきたので、プレーパークという言葉を使わない時もありました。とにかくあそび場ですよっていう感じでしたね。

後編へつづく